

St. Luke's International University Repository

成層化の過程とシンボリック相互作用

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原山, 哲 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/151

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



成層化の過程とシンボリック相互作用

原山 哲

成層研究は、従来、(1)理論の水準においては、機能主義的成層理論¹⁾、(2)調査研究の水準においては、主としてパス解析による職業移動の研究²⁾、および、社会移動の意識や社会的態度の研究³⁾、が展開されて来た、とみることが出来る。しかしながら、これら二つの水準の研究の間には、現在、乖離が存在すると言わざるをえない。R. K. マートンの言う理論と経験的調査との緊密なつながりが必要なのだ⁴⁾。このような今日の成層研究の現状の欠陥は、機能主義成層理論のモデルが、理念型としての意義をもちつつも、事実に接近するための明細化の条件を示しえないこと、および、調査研究が、その問題設定に適合的な理論を見出しえないこと、による、ということは明らかである。理論の公式化によって社会システムの相互連関における経験的帰結を予測し、経験的データとの照合をはかるというシミュレーションの技法を用いて、理論と調査研究との乖離を架橋しようとしている研究としては、R. ブドンの社会移動の研究が挙げられよう⁵⁾。しかしながら、本稿では、成層化の過程におけるシンボリック相互作用の側面に着眼することによって、(1)機能主義成層理論の理論的モデルが、事実に接近することを、よりたやすくしうる、ということ、また、(2)調査研究の理論の枠外に放置されて来たかなりの部分が、適合的な理論によって解釈しうることを、示してみることしたい。すなわち、シンボリック相互作用理論の成層研究への導入の可能性とその意義を明示することしたい。成層研究へのシンボリック相互作用理論の適用の試みとしては、A. ストラウスやP. ブルデューの研究を挙げることが出来よう⁶⁾。

一. 機能主義的分配公正とシンボリック相互作用

すでに、T. パーソンズは、今日の成層理論の関心の焦点が、社会財の差別的分配の説明よりも、その正当化の問題に、移ったことを指摘している。

「今や、現在の傾向は、社会的単位、とりわけ個人が、どのような点で平等とみなされ、みなされるべきかを強調することであり、また、不平等の要素を説明

するのみならず、とりわけ、正当化に、立証の責任が置かれることである。最も一般的な原理は明白であるように思われる。すなわち、正当化の根拠は、分析の対象となっているさまざまな行為システムの機能的必要に言及することである⁷⁾。」

すなわち、ここでのパーソンズの議論を、さらに敷衍するなら、成層の機能主義的原理とは、分配公正を指示するものであって⁸⁾、事実において社会システムが、この原理を実現しているとは限らない、という点に着眼されてよいだろう。

このような観点から興味ある実証研究として、社会的単位の認知された機能的重要性と威信との関係についての、J. ロブレアートとL. H. ハゼルリッグの研究に留意したい。図1に示されるように、両者の間には、乖離が存在する。両者の間に一致がみられるのは、「統合された (integrated)」人々と「疎外された (alienated)」人々であって、不一致がみられるのは、「寄生する人々 (parasites)」と「搾取される (exploited)」人々である。「搾取される」人々は、相対的不満を示す人々であると言えるだろう。また、表1に示されるように、このような4つの範疇に属する人々は、階層によって、その分布がかなり異なっている、ということにも注目する必要があるだろう⁹⁾。

図1 (J. Lopreato & L. E. Hazelrigg : Class, Conflict, and Mobility, 1972, p. 353.)

		機能的重要性	
		高 い	低 い
威信	高い	統 合 N = 914	奇 生 N = 64
	低い	被搾取 N = 286	疎 外 N = 54

全票本数 = 1318

表1 機能的重要性と威信に関する4つの範疇の人々の職業階層における分布 (J. Lopreato & L. E. Hazelrigg, ibid., p. 353.)

職業階層	機能的重要性と威信に関する範疇			
	統合	奇生	被搾取	奇生
エリートおよびブルジョア	20%	16%	3%	10%
プチ・ブルジョア	15	21	9	10
熟練労働者	22	22	11	8
半熟練労働者	17	30	13	21
未熟練労働者, および農業労働者	13	8	26	38
農民	12	8	38	13
計	99%	100%	100%	100%
N	914	64	286	54

ロブレアート等の研究が示しているように、成層の機能主義的原理は、事実において社会システムが実現しているとは限らない。このようなことから、成層に関する機能主義理論の可能性が、疑問視されることも肯首できるだろう。しかしながら、このような結果が生じるのは、(1)社会システムの構造が、財の機能主義的分配を結果するように構成されていないか¹⁰⁾、または、(2)機能的貢献度に関する評価基準が、社会構成員の間で合意に達していない、ということによる、と考えることが出来よう。

機能的貢献度に関する評価基準に関しては、パーソンズによる考察が留意されるべきである¹¹⁾。また、パーソンズが、評価基準に関する合意形成を果すものとして、シンボリック・メディアを指摘している点は、理論的検討に値するものと言えるだろう¹²⁾。けれども、ここでは、評価基準に関する合意形成を、シンボリック相互作用として把握したい。すなわち、行為者のパフォーマンスの機能的貢献度をめぐって、行為者間で、E.ゴッフマンの言う「自己の呈示 (presentation of self)」がなされるのである。行為者の機能的貢献度は、各行為者間の表出操作 (expression management) によって、確定される。しかも、その評価は、一義的に確定されるとは限らない。何故なら、行為者間には、各人の表出操作の結果、「完全な間主観性 (full intersubjectivity)」が存在するとは限らないからである。つまり、さまざまな社会的場面の「局域 (region)」毎に、機能的貢献度に関する異なった評価が存在し、いわば、多様なリアリティが存在することになるのである¹³⁾。

二. 成層研究へのシンボリック相互作用理論の導入

成層化の過程におけるシンボリック相互作用の側面に着眼した研究としては、まず、E.ゴッフマンの精神病患者の「モラル・キャリア (moral career)」の研究を挙げなければならない。この研究は、社会移動の研究、すなわち成層化の過程の研究とみなさなければならない。すなわち、精神病患者の入院過程は、当事者が、精神病患者として自己の規定を与えられるという意味で、「地位の下降 (status decrease)」に他ならない。しかも、この地位の下降は、当事者と、身近な人や仲介者といったエージェントとのシンボリック相互作用を経て、達成される。当事者とエージェントの間には「完全な間主観性」は存在しない。つまり、当事者は、入院した後で、自己が他者によって精神病患者として規定されていることを知るのである¹⁴⁾。

このようなゴッフマンの研究を出発点として、死ぬことの実証的研究をしたのが、A. L. ストラウスである¹⁵⁾。死ぬことも、現代産業社会の至高価値、用具的活動主義 (instrumental activism)¹⁶⁾の見地からすれば、下降移動に他ならない。その過程は、当事者とエージェントのシンボリック相互作用として把握できるだろう。すなわち、死ぬことの期待をめぐる状況の規定が、表出操作によって形成される。しかも、死ぬことは、しばしば当事者に知られることはないから、「完全な間主観性」は存在しない¹⁷⁾。この点について、ストラウスは、社会的相互行為における、4つの「知覚コンテキスト (awareness context)」を区別する。すなわち (1)「閉じられた知覚 (closed awareness)」, (2)「懷疑的知覚 (suspected awareness)」, (3)「見せかけの知覚 (mutual pretense awareness)」, (3)「開かれた知覚 (open awareness)」, である¹⁸⁾。(1)の「閉じられた知覚」の場合、患者は、自分が死にかかっていることを知らないし、家族が自分の死のためのプランを作成していることも知らない。(2)の「懷疑的知覚」の場合、このような死の期待をめぐる状況の規定が、患者によって疑われる。(3)の「見せかけの知覚」においては、患者も家族も、死にかかっているということを了承しているが、双方とも、多くの場面において、この事実を否定する。(4)の「開かれた知覚」においては、患者も家族も死にかかっていることを知っており、そのような状況規定に適合的な表出が双方の間でなされる¹⁹⁾。

このような、精神病患者の入院過程や死ぬことの過程は、ストラウスの表現によるなら、「地位の経過 (status passage)」, すなわち社会移動に他ならない。このような社会過程が、成層化の過程として、研究の

対象とされなければならないことについて、ストラウスは、次のように述べている。

「二群の社会学者〔人類学者と社会学者〕の双方の文献の中で最も強調されて来た種類の経過は、かなり規則化され(regularized)、企画され(scheduled)、規定され(prescribed)たものである。しかし、このような経過の三つの特質は、ある類型の地位の経過においては、存在しないか、ある程度においてのみ存在するものでしかない、ということもありうるのである。さらに、それ以外のある特質が、ある特定の類型の経過を特徴づけるのである²⁰⁾。」

すなわち、従来の社会移動の研究は、規則化され、企画され、規定された類型、すなわち職業移動に限定されて来た。しかし、このような特質を欠いた類型、精神病者のモラル・キャリアや死ぬことの過程もまた、社会移動という成層化の過程の中に含めなければならないのである²¹⁾。このようなさまざまな類型の社会移動を区別するために、ストラウスは、表2に示すような、特質の基準を列挙している。

以上のことから、ゴッフマン、ストラウスの社会移動という成層化の過程に対するアプローチは、(1)病者などの地位経過におけるように、企画されておらず、望ましくない類型をも含めて、考察の対象としていること、(2)地位経過が、当該の地位経過を果たす行為者とのシンボリック相互作用によって、行われる点に着眼していること、(3)行為者間に、「完全な間主観性」を前定としていないということに、その特徴がある、といえよう。企画されておらず、望ましくない地位経過は、行為者の間において、表出操作によって、「完全な間主観性」の不在をつくり出すことが、しばしば見出されるだろう。その方が、円滑に地位経過が行われるであろうからである²²⁾。

三. 理論と経験的調査との新たな架橋

一節と二節で論じたことから、成層理論は、機能主義理論のアプローチの限界をシンボリック相互作用理論が補完し、より事実に接近することが容易となる、ということが示されよう。

シンボリック相互作用理論は、成層化過程において、行為者が、どのような「移動バースペクティブ(mobility perspective)」を抱いているか²³⁾、成層化に関してどのような「世界の表徴的表示(symbolic representation of the world)」²⁴⁾をもっているか、に分析の焦点を置く。すなわち、そのようなアプローチの仕方は、成層化過程を「自己の呈示」として捉える。P.ブルデューは、「階級の形成(genèse des 《clases》)」が、社会的場における行為者間の「階級的規定を与え

表2 (A. L. Strauss: The Context of Social Mobility, 1971, pp. 164-165.)

1. 経過は、何らかの尺度において、当該の経過を遂行している人、あるいは他の関与している人々によって、望まいか、望しくないものとみなされる。
2. 経過は、何らかの程度、可逆的である。
3. ある経過は、反復的か、または非反復的である。
4. 経過を遂行している者は誰でも、一人でか、あるいは何人かの人々と集合的に、経過を遂行する。
5. 集合的に経過を遂行する場合、その人々は、全員一緒に経過の遂行が果たされていることを知覚していないかもしれない。
6. 経過を遂行することは、自発的か、あるいは非自発的な活動である。
7. さらに、ひとつの特質は、さまざまなエージェント——経過を果しているあらゆる人々も含めて——が、経過のさまざまな側面に対してもっている統制の程度である。
8. 経過は、一人か、あるいはそれ以上のエージェントによる特定の正当化を必要とする。
9. 経過のサインの明白さは——さまざまな当事者にとって——、はっきりした明白性から、ほとんど明白性のないものまで、多様に、わたっている。
10. 経過のサインは、知られているとすれば実際明白であるが、しかし、関与している人々によって偽装されるかもしれない。
11. さまざまな経過は、それに参画しているさまざまな人々にとって、さまざまな程度の中心性をもつ。
12. 経過の期間は、さらに、ひとつの特質である。その速度も同様である。

ること(classification)」によってなされることに留意し、階級を他ならず「呈示と意志としての階級(la classe comme représentation et volonté)」として捉えているが、このような考察もまた、ゴッフマン、ストラウスのアプローチと同様のものとみることが出来るだろう。とりわけ、ブルデューの試みは、いわばシンボリック相互作用に関する巨視的理論を展開している点が、注目されていてよいだろう²⁵⁾。

ところで、このようなシンボリック相互作用理論による成層化過程への視点は、これまで、職業移動の調査研究においては、欠落していたと言える。その主要な特徴は、単純化して言えば、ストラウスの指摘するように、次のようになろう。

「これまで研究され徹底的に議論されて来たひとつの中心問題は、アメリカにおいて移動は、減少しつつあ

るのか、同一、あるいは、増大しつつあるか、ということである。……第二の重要な問題は、職業、所得、富、威信、勢力のような移動のさまざまな種類、すなわち次元の間に存在する関係の性質である。……第三の重要な問題は、移動の個人、家族、制度、全体社会についての帰結である。……第四の主要な調査上の問題は、移動する個人によって用いられる主要な手段に関してである。……」²⁶⁾

「一般に、調査の発表は、『客観的な』、『ハード・データの』形をとる傾向にある。すなわち、数量的分析が、多くの他の社会学の領域におけるよりも、移動の調査において、より顕著なのである。……」²⁷⁾

機能主義的分配理論を準拠点としながら、それを「相互行為のパラダイム」へと一般化し、理論の公式化によって、このようなデータの数量的分析と理論とを、シミュレーションの技法に従って架橋したものとして、R.ブドンの研究を挙げておこう²⁸⁾。

他方、社会移動の意識や、社会的態度の研究は、上にストラウスが指摘した、調査研究の第三の問題に該当するとも言えるだろう。わが国におけるすぐれた研究としては、安田三郎のそれを挙げる事が出来る²⁹⁾。

以上の調査研究を「主流 (mainstream)」とすれば、シンボリック相互作用理論の視点に立脚する多くの質的調査研究は、「周辺 (marginal)」と言えるだろう³⁰⁾。

しかしながら、社会移動の意識や社会的態度の研究

は、成層構造における位置や移動といった客観的な条件によって説明する、という図式に立脚している。すなわち、意識や社会的態度は、それらの条件の帰結なのである。ここで、シンボリック相互作用理論の視点を導入すれば、意識や社会的態度は、成層化過程それ自体の間に組み入れて考察することが可能となる、と言わなければならない。つまり、社会移動の意識や社会的態度は、「世界の表徴的表示」であり、「移動パースペクティブ」にならないからである。また、階層帰属意識は、「自己の呈示」としての成層化過程として、把え直さなければならない、と言えるだろう。

安田三郎は、社会移動意識の調査項目を表3に示すように設定し、それを、クラスター・アナリシスによって、表4のようなクラスターに分けている。このような社会移動意識の構造分析は、成層化過程における「移動パースペクティブ」を明らかにしていることが、みてとれるだろう³¹⁾。また、階級帰属意識の研究については、城戸浩太郎、安田三郎の研究を挙げる事が出来るが³²⁾、城戸太郎は、表5に示すような階級帰属意識の分析を行っている。ここで示されているように、それぞれの職業階層が、どのようにして、資本、中間、労働といった各階級へと位置づけているかは、「自己の呈示」としての成層化過程としての意味を有しているのである³³⁾。

表3 (安田三郎『社会移動の研究』1971年、330頁)

質 問 項 目		肯定カテゴリー	対立カテゴリー
R16	(立身出世スケール)	4～7点	0～3点
R14	(立身出世は古い)	5. 古くない	1. 古い
M12	(勤労志向)	5. 仕事	1. 遊ぶ
O7	(賃金制度)	5. 能力	1. 勤続年数 3. 職務
O6	(勤労観)	5. 責任の重い仕事	1.2.3.4.
E2	(しつけ)	3. 自主的判断	1.2.4.5.
C17-23	(同調主義スケール)	0～3点	4～7点
M10	(実力と保障)	1. 実力	5. 保障
C20	(終身雇用制)	1. 流動	5. 終身雇用
M13	(知足安分)	5. 努力	1. 満足
LA9	(アスピレーション・スケール)	4～8点	0～3点
O5	(自営業志向)	5. 自営業	1. サラリーマン
A25b	(子供の職業志向)	1. 自営業	3. サラリーマン 5. 熟練工
M11	(貧困の原因)	1. 努力	5. 社会の仕組
M10-11	(Yタイプ)	1-5 平等競争主義	1-1, 5-1, 5-5
O4	(職業貴賤)	5. なし	1. 貴賤上下あり
O8	(仕事の生き甲斐)	1. いつも	3. 時々 5. 全くない

表4 (安田三郎『社会移動の研究』前掲書, 333頁)

- A : 勤労主義ないし能力主義……10 (実力と保障), M10-11(Yタイプ), M12(勤労志向), O7(賃金制度).
- B : 自律主義……C17-23 (同調主義スケール), C20 (終身雇用制), O6 (勤労観), E2 (しつけ).
- D : 出世主義……R16 (立身出世主義スケール), R14 (出世は古い).
- B' : 貧困の原因に関する意見……M11(貧困の原因).
- C : 自営業志向……O5 (自営業志向), A25b (子供の職業志向).
- F : 成功アスピレーション……LA9 (アスピレーション・スケール), M13 (知足安分).
- G : 仕事への満足感……O8 (仕事の生き甲斐).

表5 階級帰属意識の職業別百分率(城戸浩太郎『社会意識の構造』昭和45年, 115頁)

	資 本	中 間	労 働	計
管 理	.13	.44	.43	1.00
専 門	.05	.26	.69	1.00
事 務	.02	.23	.75	1.00
販 売	.02	.29	.67	1.00
工 員	.00	.05	.95	1.00
職 人	.01	.18	.81	1.00

四. 現代日本の成層化の過程

欧米型の成層構造, すなわち社会階級 (social classes) は, T.パーソンズが言うように, (1) 業績主義 (achievement) と普遍主義 (univevsalism) といった成層化の規範的原理に対して, (2) 帰属主義 (ascription) と個別主義 (particularism) といった成層化の規範的原理が, 対抗し合って作用している結果として生ずる, とみることが出来る³⁴⁾。しかるに, 日本型の成層構造は, それとは, 異なっている, と言わなければならない。すなわち, 有賀喜左衛門は, 「日本社会構造の階層制」について, 次のように述べている。

「……種々の職業集団の内部で, 生活上の上下関係が密接にむすばれると, 親分子分関係 (同統関係) が生じた点に注意したい。……同統関係が強くなると, その内部の小範囲では私的な家の関係も生じて, ほとんど同族団と同じようなものになる場合さえあった。……同族団が階層的に重なりえたように, 同じ職業集

団が大きければ, その内部で大小の同統関係が上下に配列されえた。……何階層あっても同系の同統関係なら階層的序列は明白であったが, お互に独立した同統関係なら親方の勢力の比較によって社会的序列が決まった。」³⁵⁾

同様に, 小室直樹もまた, 日本の成層構造を「ナナメの階層」として特徴づけ, 次のように説明している。「……会社という共同体に『生まれる』にさいしては, 厳重に, 業績 (をあげる能力があるかどうか) が吟味されなければならない。

すなわち, ここでは, どうしても, 業績主義とならざるをえなくなってくる。

ところが, ひとたび入社してしまえば, たちまち, 業績主義は姿を消す。……世間の評価となると, この人がどの会社に所属しているかが, 一番たいせつなこととなる。会社のランクが, この人の社会的地位——階層を決めるのだ。……」³⁶⁾

「……属性に基づく階層から業績に基づく階層へ。これが近代化の一つのプロセスをなす。これが一般論であるが, 日本の階層はこれとはちがう。業績か属性か, というのではない。

業績が属性に転化する。ここに, 現代日本独得の階層構成原理がある。……」³⁷⁾

「銀行, 商社, 販売会社……, 病院, 大学……など, もともと順序が付されたものではない。この順序なき集団が, 所属決定のメカニズムをつうじて順序がついてしまう。ここに, 現代日本における階層構成原理における決定的特色がみられる。

大学の序列が入試の難易によって決定されるのは, まさに, こうした理由による。

また, 大学の序列と会社の序列とが, 所属条件 (入社試験など) をつうじてたがいに影響を及ぼしあい, このシステムをつうじて決定される理由も, 同じく, ここにある。

このように, 本来, 序列化されていない, 会社, 大学などに序列がついて形成される階層を, ナナメの階層という。このように名づける理由は, もともと, ヨコであるものに, 序列化というタテの関係が結びつくからにはほかならない。」³⁸⁾

以上のような, 有賀喜左衛門や小室直樹の説明を, バタン変数によって整理するということを試みみるならば, 表6のようになるだろう。すなわち, 欧米型における成層化の規範的原理は, 業績主義と普遍主義とが結びついたバタンと, 帰属主義と個別主義とが結びついたバタンとが, 対抗的に作用しあっている。これが支配的である。しかるに, 日本型の成層化の規範的原理は, 有賀が「同統関係」について論じ, 小室が「業績が属性に転化する」と言っているように, 業績

主義と個別主義とが結びついたパターンと、帰属主義と普遍主義とが結びついたパターンとが、対抗的に作用しあっている。もちろん、このような欧米型と日本型との対比は、理念型的になされているものである。そして、このような支配的な対比のみならず、部分的には相互に他の組み合わせの特質もみられる点に留意されたい。

このような成層化の規範的原理に関する考察は、差別的評価、ヒエラルヒーの正当化の規範的原理に関わるものである。すなわち、このような経験的な比較の考察は、差別的評価、ヒエラルヒーの正当化といったシンボリック相互作用に着眼して、可能となるものである。それゆえ、成層化過程におけるシンボリック相互作用に留意してこそ、より深められた成層化過程の経験的な比較分析が、できる、と言えるだろう。

最後に、成層化過程における経験的調査研究において留意すべき点を指摘しておきたい。第一は、成層化の規範的原理の考察には、これまでの社会移動意識の経験的研究が役に立つであろう。たとえば、安田三郎の指摘する、「身分制」と「自然村秩序」との相互補完の関係は、日本の成層化過程についてここで論じた、成層化の規範的原理の支配的な組み合わせと、ほぼ重なり合う³⁹⁾。第二は、相対的不満の研究についてであ

る。相対的不満は、成層化過程における「自己の呈示」について行為者の間で一致しないとき生ずる。小室直樹が「ナナメの階層」と言っているように、日本型における相対的不満の生産される仕方は、欧米型と異なっている。(すなわち、本来、ヨコであるべきものに、タテの関係が結びつくのである。)第三は、日本における中間層への帰属意識についてである。わが国ほど、中間層帰属意識が高い社会はない。だが、そこにおける多元的現実をみないわけにはいかない。たとえば、顕示的消費といった表出操作によって、中間層帰属への「自己の呈示」がなされているのである。

表6 欧米型と日本型における成層化の規範的原理の比較

成層化の規範的原理	欧米型	日本型
業績主義・普遍主義 ↓ 帰属主義・個別主義	支配的	部分的
業績主義・個別主義 ↓ 帰属主義・普遍主義	部分的	支配的

注

1) 機能主義的成層理論については、K. Davis と W. E. Moore の次の論稿を主として参照。K. Davis and W. E. Moore: 《Some Principles of Stratification (1945)》 in R. Bendix and S. M. Lipset: Class, Status, and Power, 1966, pp. 47-53. また、拙稿、原山哲「社会成層論の再検討——機能主義理論の実証的展開をめざして——」『社会学研究』34号、昭和51年、参照。

2) わが国における、このような研究の代表的なものとしては、SSM全国調査がある。富永健一編『日本の階層構造』1979年、参照。

3) わが国におけるこのような研究成果としては、安田三郎『社会移動の研究』1971年、安田三郎『現代日本の階級意識』昭和48年。挙げたい。

4) R. K. Merton: 《On Sociological Theories of The Middle Range》, 《The Bearing of Sociological Theory on Empirical Research》, 《The Bearing of Empirical Research on Sociological Theory》 in R. K. Merton: Sociological Theory and Social Structure, 1968, pp. 39-72, pp. 139-155, pp. 156-171. (森東語他訳『社会理論と機能分析』, 1969, 青木書店, 4-54頁, 森東語他訳『社会理論と社会構造』昭和36年, みすず書房, 78-93頁, 94-109頁, 参照。)

5) R. Boudon: L'inegalité des chances, la mobilité dans les sociétés industrielles, 1973 (杉本一郎他訳『機会の不平等』昭和58年)

6) A. L. Strauss, The Contextes of Social Mobility, 1971. B. G. Glaser and A. L. Strauss, Status Passage, 1971, 参照。また、P. Bourdieu: Les heritiers, 1964, La distinction, 1979, 参照。

7) T. Parsons: 《Equality and Inequality in Modern Society》, in T. Parsons: Social Systems and the Evolution of Action Theory, 1977, pp. 326-327.

8) この点については、拙稿、原山哲「社会的決定論と社会的相互行為のパラダイム——R. Boudon の所説を手掛りとして——」『聖路加看護大学紀要』第9号、昭和58年、50-51頁、参照。

9) J. Lopreato and L. E. Hazelrigg: Class, Conflict, and Mobility, 1972, pp. 352-354.

10) この点については、拙稿、「社会的決定論と社会的相互行為のパラダイム——R. Boudon の所説を手掛りとして——」, 50-52頁、参照。

11) T. Parsons: 《Analytical Approach to the Theory of Social Stratification》, 《A Revised Analytical Approach to the Theory of Social Stratification》, in T. Parsons: Essays in Sociological Theory

- (revised edition) 1954, pp. 69-88, pp. 386-439.
- 12) T. Parsons: 《Equality and Inequality in Modern Society》, T. Parsons, op. cit., pp. 354-361.
 - 13) E. ゴッフマンの社会学理論については、次を参照。E. Goffman: The Presentation of Self in Everyday Life, 1959 (石黒毅訳『行為と演技——日常生活における自己呈示——』昭和49年)。また、ゴッフマンが「完全な間主観性」を前定としない、という点に関しては、次を参照。E. Goffman: Strategic Interaction, 1969, p. 72.
 - 14) E. Goffman: 《The Moral Career of the Mental Patient》 in E. Goffman: Asylum, 1968, Penguin, pp. 117-155. (石黒毅訳『アサイラム』昭和59年, 131-179頁)
 - 15) B. G. Glaser and A. L. Strauss: Awareness of Dying, 1965. B. G. Glaser and A. L. Strauss: Time for Dying, 1968. A. L. Strauss and B. G. Glaser: Anguish, 1970.
 - 16) 用具的活動主義の価値については、T. Parsons: The American University, 1973, pp. 41-44. 参照。また、T. Parsons: 《The "Gift of Life" and Its Reciprocity》 in T. Parsons, Action Theory and the Human Condition, 1978, pp. 279-280 参照。
 - 17) B. G. Glaser and A. L. Strauss: Awareness of Dying, ibid. 参照。
 - 18) B. G. Glaser and A. L. Strauss: Awareness of Dying, ibid., p. 11.
 - 19) B. G. Glaser and A. L. Strauss: Awareness of Dying, ibid., pp. 27-115.
 - 20) A. L. Strauss: The Context of Social Mobility, 1971, p. 164.
 - 21) その他、慢性疾患の患者の地位経過に関する研究として、次のものが注目される。A. L. Strauss and B. G. Glaser: Chronic Illness and the Quality of Life, 1975.
 - 22) 社会移動の成層化過程に対する、シンボリック相互作用理論のアプローチについては、次を参照。A. L. Strauss: The Context of Social Mobility, op. cit., B. G. Glaser and A. L. Strauss: Status Passage, 1971.
 - 23) A. L. Strauss: The Context of Social Mobility, ibid., p. 17.
 - 24) A. L. Strauss: The Context of Social Mobility, ibid., p. 10.
 - 25) P. Bourdieu: 《Espace social et genèse des "classes"》 in Acte de la recherche en science social, 52-53, juin 1984, pp. 3-12. また、次を参照。P. Bourdieu: La reproduction, 1971.
 - 26) A. L. Strauss: The Contexts of Social Mobility, op. cit., p. 3.
 - 27) A. L. Strauss: The Context of Social Mobility, ibid., pp. 3-4.
 - 28) R. Boudon: Effets pervers et ordre social, 1977. R. Boudon: L'inégalité des chances, 1973.
 - 29) 安田三郎『社会移動の研究』1971年, 安田三郎『現代日本の階級意識』昭和48年。
 - 30) A. L. Strauss: The Context of Social Mobility, op. cit., pp. 8-10.
 - 31) 安田三郎『社会移動の研究』前掲書, 319-352頁。
 - 32) 城戸浩太郎『社会意識の構造』昭和45年。安田三郎編『現代日本の階級意識』昭和48年。
 - 33) 城戸浩太郎『社会意識の構造』前掲書, 106-119頁。
 - 34) T. Parsons: 《Social Classes and Class Conflict in the Light of Recent Sociological Theory》 in T. Parsons: Essays in Sociological Theory, op. cit., pp. 323-335. T. Parsons 《Equality and Inequality in Modern Society, or Social Stratification Revisited》 in T. Parsons: Social Systems and the Evolution of Action Theory, op. cit., pp. 326-333.
 - 35) 有賀左衛門『日本社会の階層構造——日本の社会構造における階層制の問題——』(1950年)『有賀善左衛門著作集IV, 封建遺制と近代化』, 1967年, 346-347頁。
 - 36) 小室直樹『偏差値が日本を滅ぼす』昭和59年, 214頁。
 - 37) 小室直樹, 前掲書, 215頁。
 - 38) 小室直樹, 前掲書, 216頁。
 - 39) 安田三郎『社会移動の研究』前掲書, 450-463頁。

Symbolic Interaction in the Process of Stratification

Tetsu Harayama

Introducing the theory of symbolic interactionism in the study of stratification is significant, primarily, in that it can bridge the gap between theory and empirical research in the studies. In this paper, the significance of the symbolic interactionist approach is examined in the following four areas:

(1) Distributive Justice in Functional Terms and Symbolic Interaction

Justification of inequality in terms of functionalism should be considered as a process of symbolic interaction, and so, functional theory of stratification can be elaborated by the complementary use of symbolic interactionist theory.

(2) Studies of Stratification in Symbolic Interactionism

E. Goffman's study of the moral career of mental patients, and A. L. Strauss's study of the status passage of the dying patient are excellent examples of the study of stratification based on symbolic interactionism. In these studies, we have to notice the concept of the actor's "mobility perspective", i.e. his definition of the situation.

(3) Bridging the Gap between Theory and Empirical Research

The studies about awareness and consciousness of stratification have insufficient theory. The results of these studies can be better interpreted from the symbolic interactionist point of view.

(4) Japanese Society's Stratification

It is necessary to focus on the process of symbolic interaction, especially the differential evaluation, in the comparative study of the Western type of stratification, i.e. social classes, and the Japanese type, i.e. "inclined stratification". We can construct the hypothesis that the evaluative standards of the Japanese type are characterized by achievement and particularism.

